

榎坂病院

住所	吹田市江坂町 4 丁目 32 番 1 号	電話	0 6 -6 3 8 4 -3 3 6 5
病床数	3 6 0 床	病棟数	6 病棟

人権センターニュース No.76 より

オンブズマン活動報告

平成17年9月21日訪問

病院全体

病院の敷地と道路の境にはフェンスがあり、上部は敷地内に向けて曲げられていた。(敷地内からフェンスを越えて出ることを防ぐ形になっていた。)

病棟

各階に 2 つの病棟、詰所があった。それぞれの階は回廊式で、中庭を囲うかたちで廊下、デイルーム、喫煙室があった。窓際などにさまざまな形の椅子やソファが置かれていた。太陽の光がたくさん入り、明るく広々としていた。病棟内の廊下にモニターカメラがあった。

【詰所】詰所はオープン式で低めの木目調のカウンターだった。

【診察】診察は、週 1 回、担当主治医が、診察室で行う。

【隔離室】隔離室は各病棟の詰所内に 3 から 5 室あった。1 階の隔離室は天窓がひとつで暗かった。床、壁はやわらかい。集音マイクとモニターがあった。布団、マクラ等はリース会社のもので、入室者が変われば、布団ごとと交換する仕組みで、シーツ類はない。室内には、エアコンの吹き出し口、換気扇、トイレットペーパーを折り畳んだ紙などがあった。穴があるだけの和式トイレで、その上にポータブルトイレが置いてあるところもあった。トイレの囲いはなかった。トイレの水は隔離室の中からは流せず、患者が扉をたたか、声を出して看護師を呼ぶか、看護師が集音マイクかカメラで隔離室内の状況を把握して流しに行く。

床の上に布団を敷き、拘束できるよう床に穴が数ヶ所ずつあった。どのような時に使うのかについては、病院側によると「保護室の利用だけでは治まらない自傷行為がある時など」とのこと。ドアに、四角い穴があいていた。「薬や配膳を差し入れる時に使う。保護室は年数回しか使用することはない」との説明があった。

【病室】1 人部屋から 6 人部屋まであった。ベッド毎のカーテンはなく、木目調の床頭台、タンスでベッド毎が仕切られていた。

【飲み物】2、3 階には冷水機があった。お茶は食事の際と 15:00、19:20 に出される。1 階には給湯室があり、水、湯、茶が自由に利用できる。

【入浴】入浴は、週 2 回で、風呂の順番は部屋ごとに交代する。患者の声「一番風呂が交代制なのはいい」

【洗濯】1F は病棟内にコインランドリーがあり、2、3 階の患者は屋上のコインランドリーが使える。業者に頼む人、家族が持ち帰る人もおられる。

【喫煙】喫煙室は中庭に面して設置され、完全分煙だった。明るく、広く、きれいだった。煙草が病院管理の患者は、1 日に 11 回、隔離室の患者は 1 日に 5 回の決められた時間に、煙草を手渡される。

【面会】各病棟内に面会室があった。病室で面会している方もおられた。

【意見箱】意見箱に入れられた意見は人権倫理委員会で検討され、意見への回答は「意見書だより」として病棟に掲示されていた。大きな文字で見やすい掲示だった。病院側によると「掲示して出したことで、意見箱にいろいろと入るようになった」「人権倫理委員会の構成は、医師 1 名、看護師 5 名、栄養士 1 名、薬剤師 1 名、ケー

スワーカー1名、事務1名」とのこと。

【外出】閉鎖病棟では詰所に、患者ごとの指示票と処方録の黒いファイルに入院形態や行動範囲の許可関係の書類がとじてあり、詰所内に一覧となって掲示されているようなものはなかった。外出については、「単独で院外まで外出が可能、単独で院内のみ外出が可能、職員や家族の同伴であれば院外まで外出が可能」の3パターンがあった。売店への買物の付き添いは1日1回ある。隔週水曜日ごとに、中庭で行われる院内喫茶を利用する時にも病棟から出ることができる。

開放病棟では詰所のカウンター上にある「外出泊許可書（願）」に名前や行き先を記入し、事務所に出す。訪問活動中に、数人の患者が届出に記入をし、病棟から出ていかれた。閉鎖病棟や開放病棟の患者の声、病院側によると外出の行き先は緑地公園や駅前のスーパー、100円ショップ、本屋などが多いようだった。

【金銭管理】「フレンド（売店）預かりの人が多い。フレンド（売店）は外部の業者に委託している」との説明。売店の職員によると「こづかい台帳はつけている。家族の申請があれば、コピーを渡している」とのことだった。管理費は、月3500円。金銭の自己管理をしている人は、閉鎖病棟入院患者では3分の1から4分の1」とのこと。

デイルームに1回施錠する毎に50円かかるロッカーがあった。鍵を買ってきて床頭台につけることができるので、そちらを使う人が多い。

【売店】売店の外部委託について、タオル400円・ショーツ360円・ブリーフ2枚で600円と、普通のスーパーでの値段より高く設定されているのが気になることを尋ねると、「診療行為とは別だから、独立した会社に委託している。銀行の協力も得ている」とのことだった。

【退院に向けた取組み】病棟担当のケースワーカーは6名、外来担当1名、デイケア担当1名。病院側によると「豊中市、吹田市の社会資源との連携を図っている」とのことだった。

1階（開放・療養病棟）

中庭を囲むような形で男性病棟、女性病棟と分かれていて、それぞれにナースステーションもあるが、廊下はつながっていた。女性は男性病棟に入ることができるが、男性は女性病棟に入ってはいけない。

デイルームや廊下に観葉植物があった。中庭に面した廊下の一部で、天井のカーテンの開閉により、光をたくさん取り入れるなどの調整ができるようになっていた。廊下から簡単に中庭に出ることができ、中庭では、複数で談笑している患者、1人で太陽を浴びている患者がおられた。

病院側によると「午前9時半から午後7時が開放時間だが、多くの患者は食事までに帰院される」とのこと。

「すずめの会」というプログラムがあるとの掲示があった。内容はグループワーク、言語コミュニケーションのSST。

2階（男性・閉鎖病棟）【個別開放処遇】

病院側によると「2A病棟は新規入院の患者、2B病棟は長期入院の方、高齢の男性が多い」とのこと。

詰所のカウンター下に病室ナンバーの書かれた貼り紙があった。病院側にお尋ねすると「患者が薬を取りに来たときに並ぶため」とのことだった。

3階（女性・閉鎖病棟）【個別開放処遇】

病院側によると「3A病棟は新規入院の患者、3B病棟は長期入院の方、高齢の女性が多い。A棟では、単独外出許可は15名。「病院側の説明は「45名は家族の方がこられた時は、外にでられます。1日おきに建物外へ外出している人も何人かいる」とのことだった。

年間2回のレクで映画会を、食堂奥手のデイケアルームにておこなう。

洗濯は業者に頼んでいる人は、A棟で24人。

【患者の声】「ここの看護師さん、みなさん、明るくてやさしい」「意見書だよりは読みしてもらっています」「中庭や1階のサンルームで出店ラサンテがあってうれしいです」「お風呂の順番が、部屋ごとに平等にまわるのがいい」

検討事項

【カーテンの設置】

全ての病棟において、ベッドサイドのカーテンがなかった。病院側によると「8年ほど前から議論してきたが、事故防止のため、まだカーテン設置の時期ではないと判断している」とのこと。しかし、これまで訪問した病院の中でも数多くの病院が、この数年でカーテンを新たに設置している。カーテン設置と事故の因果関係についても、それらの病院からは聞かない。当院においても患者のプライバシーを守る配慮から、カーテンの設置について検討していただきたい。

【榎坂コイン】

院内では榎坂病院でのみ通用する榎坂コイン（1枚100円）が使われていた。病院側によると「毎日、病棟内事務員が50枚の榎坂コインを事務所から病棟へ運ぶ」とのこと。「クラーク（事務員という意味）」と放送があると、詰所前に榎坂コインを受け取るための行列ができる。金銭を病院に預けている患者は受け取る時に名前を言うと、預けている金銭から受け取ったコインの代金を差し引かれる。現金を所持している患者は現金100円で榎坂コイン1枚を買うようになっている。

病棟にある自動販売機は、通常80円～120円の飲料を、榎坂コイン1個で購入する。「通常80円のジュースが100円になるのはなぜか」と質問したところ「病院全体の販売量によって値段を決めた。110円の紙コップコーラが一番人気」との回答だった。

病院専用のコインを使う理由については、病院側によると「なるべく現金をもたないよう。よそで使われへんように。なくした、落とした、盗難防止の意味も含めて専用コインを使っている」とのこと。しかし、紛失、盗難は病院専用のコインであれ通常の貨幣であれ、発生する。また、人権センターには退院した患者から「管理されていることの象徴のような榎坂コインだった。売店にいけるまでお金の使用をがまんした。」との声が届いている。退院後の生活を考えると、硬貨1枚の価値に対する感覚を失わないためにも、10円玉、100円玉が使える方が望ましいと思われる。

【公衆電話の位置】

公衆電話が詰所前にあり、まわりに囲いなどはなかった。病院側からは、「配線が詰所の位置となっているため。プライバシーには配慮し内容は聞かない、患者さんはよく公衆電話を使っている」との説明があった。配線コードを延ばすなどすれば、詰所前から電話を離すことも可能と思われる。患者の他人に聞かれたくないプライベートなことや、病院や職員に対する不満などを、周囲に気兼ねすることなく電話できる場所への移動を検討していただきたい。

【隔離室のトイレの囲い】

隔離室のトイレに囲いがなかった。患者個人の尊厳のためにも、なんらかの「しきり」「囲い」の設置について検討していただきたい。

【薬の渡し方】

2階男性閉鎖病棟では、詰所のカウンター下に病室ナンバーの書かれた貼り紙があり、病院側にお尋ねすると「患者が薬を取りに来たときに並ぶため」とのことだった。他の病棟での状況は確認できていないが、病院全体の問題として、患者個人の尊厳を守る意味でも、看護師が病室に行き、ひとりひとりに薬を渡すしくみの導入を検討していただきたい。

【オンブズマンの受け入れについて】

各班の訪問活動に2、3名の病院職員がついてこられた。訪問したオンブズマン側も緊張感がとけず、患者も、オンブズマンが話しかけようとする、後ろにいる職員の顔をみて、すっとひいていかれるか、職員へのお礼や感謝の気持ちを述べる方が多かった。患者にとっては、自由に話しにくい、病院への不満や要望などは言いにくい雰囲気になっていたのではないだろうか。これでは、患者の生の声を聞くことは難しいと感じた。この点について大阪府精神障害者権利擁護連絡協議会から、大阪精神病院協会傘下の各病院に対して、「病院職員は詰所においてオンブズマン活動を見守る」というスタンスで対応していただきたい旨をあらためて徹底していただきたい。

人権センターが情報公開請求で入手した

H18 大阪府精神保健福祉関係資料より

(榎坂病院分)

341名の入院者のうち統合失調症群が284名(83%)、気分障害が20名(6%)、神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害20名(6%)、入院形態については、341名のうち234名(69%)は任意入院、107名(31%)が医療保護入院。在院期間が1年未満の患者が67名(20%)、1年以上5年未満の患者が113名(33%)、5年以上10年未満の患者が49名(14%)、10年以上20年未満が65名(19%)、20年以上が47名(14%)。

(H18.6.30時点のデータ)